

【特別論文】

柏楊『醜い中国人』の反響と波紋（1985-2024）

——台湾と中国大陸を中心に——

周 俊宇

中村元哉, 家永真幸, 小野泰教, 久保茉莉子, 鶴園裕基, 森巧訳

〈訳者前書き〉

周俊宇氏は、台湾からの留学生として、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻で2020年6月に博士学位を取得した。博士学位請求論文のタイトルは、「支那民族性というまなざし——日本の植民地統治と台湾人認識」『アジア地域文化研究』17, 2021, 136-138 参照) である。

以上のように、周俊宇氏は東京大学駒場キャンパスと深い繋がりをもつ台湾の研究者(国立政治大学台湾史研究所・助理教授)である。その周氏が、2023年9月15日に東京で開催された「新しい近現代中国研究の学術交流(第4回)」に参加し、報告ペーパー「柏楊『醜陋的中国人』的迴響與波瀾(1985-2024)——以台灣和中國大陸為主的考察」を提出して下さった。その日本語版が、ここに掲載する特別論文である。訳文は読みやすさを優先して思い切って意訳し、訳者の判断で補った箇所は〔 〕で示した。この作業過程で、原文の一部を抄訳したり、漢字を常用漢字に改めたりした。

本来、改稿・翻訳・投稿といった一連のプロセスは、著者自身の手によってなされなければならない。ところが、大変遺憾なことに、周俊宇氏は2023年12月25日に台北で43歳の若さで急逝された。周氏は、今後の日台間の学術交流を担うことを期待された、最も頼りになる台湾側の研究者だっただけに、日本側の多くの関係者は筆舌に尽くしがたいほどの悲しみに暮れている。

私たち訳者は、周俊宇氏に対して哀悼の意を表すため、周氏の御親族・関係者ならびに政治大学台湾史研究所のご了解の下、本誌に日本語版を掲載することにした。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

訳者一同

はじめに

私は、日本植民地統治下の「台湾人」の「民族性」に関する博士論文をまとめた。しかし、この博士論文がどこまで真実を反映できたのかは定かではない。私は、この論文で、単にその生成の背景と背後にある力学、そして、国家、社会、「族群」〔エスニック集団〕の相互の関係性に注意を払っただけだった。近年、この研究テーマの延長線上に、思想史の

角度から戦後台湾社会の「台湾人論」を掘り起こそうとする試みがある。これは、共同体としての台湾人の特殊性やその未来を展望する研究と関係のあるテーマである。

台湾は、第二次世界大戦後、中華民国（中国国民党政権）の党国体制と形容されるような権威主義的な統治体制の下で、反共的中華ナショナリズムを「国族」[台湾で創出しようとしている国民という概念]を形成するための最高指導原則とした。この時期、台湾では、共同体としての台湾人という特殊性を、公開の場で、はっきりと討論することはできなかった。たとえ、[中華民国が誕生した地の]中国人の特質を論じることになったとしても、それは、当局による国民形成の主流のイデオロギーに容易に反するものだったため、タブーとなった。

しかし、台湾社会が緩やかに民主化へと向かった1980年代、中国人の醜さを暴露する書籍が出版された。それが、作家の柏楊（1920-2008）が1985年に出版した『醜い中国人』だった⁽¹⁾。同書は、「醬缸文化」[中国ではいかなる人も、どろどろした中国文化に漬けて込まれて、鮮度を失っていくこと。醬缸とは漬物甕のこと]などの比喩を使って中国の政治的伝統や社会文化を批判し、台湾や中国大陸をはじめとする華人社会で反響を引き起こすと同時に、数多くの波紋を呼んだ。

柏楊の人物伝やその人文思想あるいは彼に関わる政治的出来事については、すでに一定の研究蓄積がある。それらのうち、比較的重要なのは、香港大学アジア研究センターが1999年に開催した「柏楊の思想と文学に関する国際学術討論会」であり、台湾でいえば、行政院文化研究委員会が2003年に主催し、国立中央大学中国文学学部が責任者となった「柏楊の文学・史学・思想に関する国際学術討論会」だった。これらに前後して、台湾、香港、中国大陸、米国（アメリカ）、ドイツの学者たちが柏楊の思想、雑文、史論、詩文、小説を議論し、柏楊自身が出席して発言したりした。本論の趣旨からすれば、とりわけ関連のある論文は、林洪養（向陽）、梁敏兒、ユルゲン・リッター（Jürgen Ritter/周裕耕）、陳曉明、朱洪海らのものである⁽²⁾。また、中国大陸の成果に着目すれば、陝西師範大学が2004年に開催した「柏楊と中国文化に関する討論会」などの学術活動がある⁽³⁾。さらに、柏楊の他界後には、柏楊のテキスト研究が博士学位請求論文として続々と世に出された。たとえば、台湾大学の陳聖屏⁽⁴⁾、北京大学の張清芳⁽⁵⁾の論文である。このほかにも、学術誌に掲載された論文⁽⁶⁾や国立台湾文学館が研究のために編集した資料集もある⁽⁷⁾。2018年には、台湾と中国大陸で、柏楊の逝去10周年の学術記念活動がおこなわれた⁽⁸⁾。

柏楊『醜い中国人』をめぐる、その議論の熱気は上昇したり下降したりしたが、同書は、華人社会では、長期にわたって影響力をもった。しかし、2021年、柏楊の未亡人張香華は、台湾と中国大陸の出版社に対して、「柏楊の遺志により、『醜い中国人』の発行を永久に停止する」との声明を出した。彼女がこのような声明を発したのは、台湾の教科書会社が同書の文章を中学1年生の国語の教科書に収録しようとしたからだった。彼女は、このような教科書会社の行為が「反中」を助長するとして、その当時の政権[民進党の蔡英文

政権]の「脱中国化」の教育政策に反対し、出版契約が2024年に終了したら、同書を発行しないと表明した⁹⁾。

柏楊『醜い中国人』に関する従来の研究の多くは、著者の動機や執筆の戦略、あるいは、その思想を分析しようとするものだった。本論は、これらの研究成果を土台として、新聞データベースのキーワード検索機能を活用しながら、私の近年の研究関心に立ち返って次のような課題を設定したい。すなわち、本論は、柏楊が『醜い中国人』を出版した後、同書が台湾や中国大陸を主とする華人社会に残した軌跡と影響力を初歩的に分析し、同書が戦後の「台湾人論」の系譜にどのような思想史的意義を持ったのかを考察したい。

第一節 中国人はいつから「醜く」なったのか

(一) 観光と外交とお国柄

柏楊『醜い中国人』は、当時の華人社会にセンセーションを巻き起こした。そして、著者の柏楊自身は、この書名がアメリカの『醜いアメリカ人』や日本の『醜い日本人』の影響を受けたものだ、と認めている¹⁰⁾。しかし、私が「醜い中国人」をキーワードにして台湾の『聯合報』や『中国時報』などのデータベースで関連する報道や時論を調べたところ、この言葉が台湾で初めて使用されたのは柏楊の文章ではなかった。

「醜い中国人」という言葉が台湾の新聞で初めて大量に使われたのは、私の初歩的な理解によれば、1972年のことだった。

中華民国政府は、1968年、国民の海外観光旅行を認めると、1970年代から1980年代にかけて国民の出国を後押しするためのさまざまな取り組みを強化した。たとえば、1970年代の「十大建設」計画には、国際空港の建設が取り入れられた。ところが、国際空港が正式に開港される1979年まで、台北の軍民共用の松山国際空港が依然として海外への窓口として利用され、その松山空港が1972年に改修されると、多くの人びとが〔改修直後に〕広場の芝生を踏み荒らす事態となった。それを受けて、当時の新聞社は、国民が公德心を持つように呼びかけた。たとえば、作家で学者でもあった寒爵（本名は韓道誠／1917-2009）¹¹⁾は、〔この時に〕「醜い中国人」という文章を書き残している。そこでは、「野蛮な国」のペルーと「礼儀の国」の中国（すなわち中華民国）、あるいは、シンガポールの「黄色い顔の華人」と中国（すなわち中華民国）の「黄色い顔の中国人」を対比するなどして、国民に公德心を育むように反省を促した¹²⁾。

政府が国民に海外観光旅行を開放したのは、まさに中華民国の国際的地位が大きく変わろうとしていた頃だった。中央信託局副局長兼東京事務所所長を1969年に引退した後シンガポールに隠居した周賢頌（1895-不明）は、「醜い中国人にならないようにしよう」という文章で、政府が海外観光旅行を国民に開放した際に、国民を「醜い中国人」にしてはならない、と訴えた。周は、確かに日本やアメリカにも醜い態度はあるが、それでも〔中華民国の〕国民は気をつけなければならない、と注意を促した。たとえば、海外では、外でスー

ブを飲む際に大きな音を立てない、エントランスでは靴底を拭かなければならない、などである。彼は、政府が海外観光旅行のガイドブックを発行して、海外旅行のマナーを国民に教えるべきだ、と提案した⁽¹³⁾。

この周賢頌の文章に対して、ジャーナリストで作家でもあった何凡（本名は夏信英／1910-2002）は即座に反応した。何は、「国家代表を気取って」という文章で、次のように指摘した。日本人には「いつでも靴を脱ぎ、どこでも小便をする」という醜い顔があるが、日本人は、面子を「失ったとしても、まだ耐えられる」。しかし、「外交的に孤立している」台湾は、より慎重にならざるを得ない。我が国はアメリカとの国交関係をまだ維持しているとはいえ、台湾からの訪米観光客の増加にともなって、「もしその中に「醜い中国人」が紛れ込んでいれば、私たちが支持しようとするアメリカ人は困惑することだろう」。彼は、新聞や雑誌が〔国民の意識を高めるための〕原稿を募って大勢で意見交換すれば、国民の関心が喚起されるだろう、と考えた⁽¹⁴⁾。

この文章が公表された1ヵ月後、アメリカは、中華人民共和国と国交を樹立する、と表明した。周賢宗は、アメリカとの断交が中華民国に与える衝撃を予想し、「醜い中国人」というイメージを〔逆手に〕利用しながら国民外交を展開することが大切だ、と力説した⁽¹⁵⁾。

この時期の報道や時事問題からは、「醜い中国人」という警告を観光、国民外交、国家の外部評価などとしばしば結びつけていたことが分かる⁽¹⁶⁾。新聞社は、観光とは外部の人たちが「私たちの本質を観ること」であり、国民は「国のために観光する」のであるから、自分たちの恥をさらけ出さないようにしなければならない、とコメントした。

「美」という漢字が頭にくる「美国」〔アメリカ〕で、ある人が「醜いアメリカ人」を書いた。その後、これを機械的に模倣する風潮が広まり、日本では「醜い日本人」が書かれ、同じぐらい「醜い」とされた。もし我が国の人が、アメリカと日本は自分たちよりも「醜い」のだという単純な思考から脱して、〔自分たちにも同質の問題があると認めて〕「醜い中国人」を書くとするならば、その書籍のなかで観光客は重要な分析対象になるだろう⁽¹⁷⁾。

（二）中国人の性格に関する学術研究

他方で、柏楊『醜い中国人』が出版される以前から、学術的な観点から中国人の民族性を検討しようとした学者が存在した。

民族学者の李怡遠（1931-2017）と心理学者の楊国柱（1932-2018）は、1970年代に学者を集めて研究プロジェクトを推進し、社会科学の角度から中国人の民族性を議論した。その成果は、中央研究院民族学研究所が1972年に出版した『中国人の性格』にまとめられた。2人の学者は、同書の出版が当時としては目新しく、広く注目を集めた一方で、次のような問題が発生した、と回想している。すなわち、「確かに、特殊な背景をもつ一部の学者の疑

念が引き起こされたとはいえ、漠然と広がっていた政治主義を隠れ蓑として、その特殊な影響力が発揮された結果、同書は出版から3年後に発行できなくなってしまった」と、しかし、同書の需要は根強く存在し、海賊版が世間に出回るほどの人気を博した⁽¹⁸⁾。

『中国人の性格』を執筆した学者たちは、1980年代に研究を復活させ、メディアで注目を集めた。1984年、メディアには、次のようなコメントが掲載された。10年ほど前、「中国人の性格」という研究が歴史、心理、社会などの角度から展開されたが、「学術以外の要因によって、[その研究成果は]長期にわたり流通を制限されてしまった。[そのため、このような研究の停滞は、]国民が民族性を反省する障害となってしまった」。したがって、今回の学術会議は「以前の研究の継続だとみなせる」と。

この会議で、楊国枢は、中国人の民族性には現代社会に適応し難い多くの社会心理的な要因があり、それが中国近代史の悲劇となった、と指摘した。会議に参加した学者たちは、かつてのアメリカや日本でみられた議論と同じように、楊氏の報告を学術研究としての「醜い中国人」だ、とみなした。また、一部の学者たちは、重い胸の内を告白して、中国人の性格を[何らかの作品のように]鑑賞するという角度から研究できるのではないかと示唆した⁽¹⁹⁾。

その後、1987年に台湾の政治や社会の環境が変化したことで、学術や文化に対するタブーが大幅に緩和された。そのため、これらの研究成果は、桂冠図書出版から再び出版されるようになった⁽²⁰⁾。『中国人の性格』、『中国人の心理』、『中国人の変容』などで構成された「中国人系列叢書」がそれである⁽²¹⁾。

第二節 柏楊と『醜い中国人』

(一) 「醬缸文化」論の生成

前節では、「醜い中国人」という言葉が1970年代以降の台湾で生み出された背景について検討した。明らかなのは、柏楊がこの言葉を最も響き渡らせた、ということである。

柏楊は1949年に台湾に渡り、1952年から小説を書き始め、1960年代には『自立晩報』や『公論報』で雑文を発表するようになった。その内容の多くは、中国文化の病的状態や社会の暗黒面を暴くものだった。1968年、彼は、蔣介石・蔣経国の権威主義体制のタブーに触れたことから⁽²²⁾、「人民と政府の間の感情を煽り立てた」などの罪状で逮捕され、1977年まで投獄された。釈放後の1985年に、アメリカでの講演をもとにして『醜い中国人』を出版し、もう一つの代表作となる『柏楊版資治通鑑』(2003年)の元ネタとなる作業にも1983年から着手した⁽²³⁾。1990年代以降は人権教育に注力し⁽²⁴⁾、1994年にはアムネスティ・インターナショナル中華民国総会初代会長に、2000年には総統府国策顧問に就任した。

「醬缸文化」論は、柏楊による中国人の民族性についての観察や批評であり、1960年代にはじまる「雑文の十年」と呼ばれた時期に次第に形成されたものだった。林洪濤の整理によれば、柏楊は、1960年5月から『自立晩報』の「副刊」[文芸・学術欄]やコラムなどで

雑文を発表し、「醬缸」がそれらの中心的概念になった⁽²⁵⁾。当時、雷震ら『自由中国』をはじめとするリベラルなコミュニティーが新党の結成に動いたものの、それらは弾圧されてしまった。柏楊によれば、こうした事態の推移は、「政治上の改革が困難に直面するのは文化上の悪質な発酵によるものだ」ということを改めて認識させるものであり、一連の雑文を通して、「醬缸文化」を希釈してこそ、中国人の心に滞っている苦しみを取り除くことができる」ということを再認識させるものだった⁽²⁶⁾。また、中国大陸で古くからメディア業界に携わっていた楊侖によれば、柏楊は、瀋陽の国立東北大学に提出した学士論文「政治闘争研究」において、政治闘争を理解するためには民族性が重要なことを一定の分量を割いて紹介していた、とのことである⁽²⁷⁾。

このように雑文を執筆していた頃の柏楊の批判的文章は、投獄時代に書き溜めていた歴史に関する原稿と合わせて、1980年代に集大成された。柏楊は、1984年にアメリカで「醜い中国人」と題した講演をおこない、海外の華人社会に中国人の「醬缸文化」を暴き出し、中国の祖先たちが残してきた、いわば伝統文化に根差した病状——誠意に欠け、利己的で、過ちを認めようとせず、団結ができないことなど——を批判した。彼は、1985年に、この講演の草稿やインタビュー記録、以前に発表した数篇の雑文、読者の反応などをもとにして『醜い中国人』を出版した。同書は、出版した1985年のうちに5刷まで版を重ね⁽²⁸⁾、その後数年間、有名書店が実施したその年度で最も影響力のある書籍ランキングや学生の愛読書ランキングで〔上位に〕選出された⁽²⁹⁾。

柏楊は、「中国人はなぜ醜いのか」という問題に対して、その「資質」に原因があるわけではない、と考えた。

中国人は決して資質が悪いわけではない。中国人の資質は、中国を健康で満ち足りた境地へと十分に至らせることができる。我われには、そのようにできる資格があり、中国が良い国になると信じる理由もある。しかし、我われは、自分たちの国家が強大になることをいつも望まなくてもいい。国家が強大でなかったとして、どんな影響があろうか。人民が幸福でさえあれば、その後に強大さを求めても遅くはないだろう。私は、我われ中国人が崇高な資質を有していると考えている。しかし、なぜ中国人は数百年来苦難から抜け出せないのだろうか。どんな原因があるのだろうか。

僭越ながら、総合的な答えを示してみたい。それは、中国の伝統文化のなかに、ある種のウイルスが存在し、それが我われの子々孫々に感染し、今日に至るまで治癒できていないからである⁽³⁰⁾。

林洪義の研究によれば、柏楊の「醬缸文化」論は、「醬缸」の特徴——長期間腐らず保存しやすいものの発酵してカビが生えてしまうという特徴——をイメージとする記号表現 (signifier) であり、その記号内容 (signified) は、儒家の伝統と民族性という2種類の心

理的概念を指している。前者は道徳と政治という2種の権威が結びついたイデオロギーであり、後者は封建意識と士大夫意識とが混在した中国人の性格である。この2種類の心理的概念が、上から下、下から上へと交わり合い、中国人の社会を「腐食力と凝固力が極めて強い混沌社会」とした。こうした認識は、「醬缸」という中国の統治にかかわる神話学的な代名詞において意味作用（signification）を起こしたのである⁽³¹⁾。

しかし、柏楊は、『醜い中国人』で中国人という全体を細かく観察しようとしたにもかかわらず、そこで議論された多くの事例は1960年代の台湾での日常生活の出来事だった。彼は、些細な社会のもめごとを通して本質を鋭く観察した。当初は厳密な理論を有していたわけではなかったが、まさにこうした本質を突く風刺が幅広い共感呼んで、「雑文の十年」と呼ばれた時期の後半に概念化と理論化がすすんだ結果、〔彼の主張は〕「醬缸」となっていたのである⁽³²⁾。

確かに、彼は、反右派闘争や文化大革命などの中華人民共和国での事例を取り上げたとはいえ⁽³³⁾、日常生活にかかわるほとんどの事例は、彼本人や彼の家族が台湾で自ら経験したかあるいは見聞きしたものであった。たとえば、『醜い中国人』という文章でも言及されているように、妻の張香華が学校で教壇に立ち、人としての道理を学生に指導したところ、学生からの反対にあった〔というエピソードなどである〕。この時、学生は、教育は試験にさえ対応できれば良い、と主張したという⁽³⁴⁾。

さらに、『醜い中国人』には検証し難い箇所が少なくない。たとえば、次のような記述である。ある人の母親が気を失って倒れたため、その人が母親を助け起こそうとしたが、母親に拒絶されてしまった。母親は、「私が死んだらそれまでよ。私にかまってどうするの。勉強しなさい！ 勉強しなさい！」と言ったという⁽³⁵⁾。柏楊の雑文は、学術的に書かれたものではないため、厳格な根拠を必要としているわけではない。しかし、柏楊は、これらの民族性に関する文章がフィクションに過ぎず、文学的に書いたに過ぎない、とも言っていない。これらの文章の問題の一つは、検証困難な描写とその誇張された表現との境界線が曖昧なことである。

ドイツの研究者ユルゲン・リッターは、次のように指摘した。柏楊の文化批判のほとんどは、中国が西洋諸国や日本に及ばないことを問題視した五四運動期の知識人のそれと同質である。しかし、彼は、五四運動期の知識人と比べると、新聞のコラムを執筆したことで、啓蒙の対象としたい多くの人びとと意思疎通できるチャンスに恵まれていた。ところが、彼の伝統批判が1920年代後半の自らが体験した中国に根差しているのか、それとも1960年代の台湾での体験に根差しているのかはよく分からなかったとしても、この伝統批判は、実際のところ、蔣介石政権のイデオロギーに対して間接的になされたものだった。だからこそ、彼は、1980年代から1990年代に台湾が産業を近代化し、政治を民主化し、社会を多元化して1960年代とは異なる様相を見せ始めると、自分の1960年代の記述をどのように1980年代から1990年代の現実とつなぎ合わせるのかで戸惑うようになったのだっ

た⁽³⁶⁾。

(二) テキストの伝播と反響

『醜い中国人』が台湾社会で幾度となく再版されたことは、同書が台湾で長期的かつ持続的な影響力を持っていることを示している⁽³⁷⁾。柏楊は、1995年に『「醬缸」を揺り動かす——醜い中国人を再び論ず』を出版した際、『醜い中国人』は内容がいささか浅薄であり、この続編は、前著よりも深く掘り下げてある」と述べた⁽³⁸⁾。しかし、その衝撃力や影響力は、前著には及ばなかった⁽³⁹⁾。また、この時の論壇では、同時に異なった反応もみられた。たとえば、著名な作家である李敖は、自著において、私生活からみれば『醜い中国人』を書いた柏楊本人が「醜い中国人」だ、と批判した⁽⁴⁰⁾。

『醜い中国人』は台湾社会で議論を引き起こし続け、「醜い中国人」という言葉が定着するまでに至った。1987年、音楽家の傅聰は、テレビ番組のインタビューで、司会者の張小燕から悩みがあるかどうか尋ねられると、「ほぼ毎日あります。家庭の悩みや音楽の悩み、大きなものでは中国人としての悩みです。中国人は意気地がなく、公德心がないからです」と答え、『醜い中国人』が自身の愛読書だと述べた⁽⁴¹⁾。このように、「醜い中国人」という言葉は、公德心に関する新聞記事——台湾の人びとが公共スペースの芝生を踏み荒らすことを批判する記事——などにも自然と現れ⁽⁴²⁾、1994年には、台湾テレビの講談問答番組「談笑書声」が『醜い中国人』をテキストとして選定したりもした⁽⁴³⁾。

『醜い中国人』の各版は、日本や中国大陸でも流通した。中国大陸では、簡体字版が販売され、非合法な海賊版も各省で現れた。その反響については、次節で詳述することにした。また、初の外国語訳は、在日の台湾作家である張良澤が1988年3月に光文社から出した日本語訳だった。この日本語版は、日本出版販売株式会社(日販)の同年4月2日から4月8日までの統計によれば、日販のベストセラーランキング非文学部門で第8位となり、販売量は5万5千冊に達した。4月12日には、別の流通会社である東京出版販売株式会社[現在の株式会社トーハン]のランキングのベストスリーにも入った。この時の報道によれば、これは、日本のベストセラーランキングで現代台湾作家の作品が初めてランクインした快挙だった。張良澤の指摘によれば、同書が日本でベストセラーになった理由は、書名が読者の関心を惹きつけたからだった。つまり、日本人は中国人が傲慢かつ尊大で自文化中心主義に満ち満ちているとみていたので、この書名が読者の関心を惹きつけた、ということである。もちろん、その当時の日本では中国ブームが存在し、また、同書が北京で取り締まられたことから、多くの読者を獲得したという事情もあった⁽⁴⁴⁾。

以下では、『醜い中国人』が1980年代以降の中国大陸でどのように論評され、どのように受け入れられたのか、さらに、1990年代以降、台湾社会が変遷していくなかで、どのように受けとめられたのかを検討してみたい。

第三節 中国大陸の反響——「我われのこと」として考える

（一）1980年代の中国大陸

『醜い中国人』が全世界の華人社会で引き起こした反響を論じるならば、最も多くの「中国人」を擁する中国大陸を省くわけにはいかない。同書が出版された後、1986年には中国大陸で数社の出版社が簡体字版を発行した⁽⁴⁵⁾。この時まで、柏楊が中華人民共和国統治下の中国大陸で過ごしたことは一日もなかった。しかし、中国大陸の学术界や言論界は、中国人の元々の故郷や発祥地として、意外にも積極的な反応を示した。

1987年、趙雲怡は『貴陽師專学報』で『醜い中国人』を評すを発表し、柏楊の「憂国憂民」の苦悩が中国大陸で反作用を引き起こした、と指摘した。「柏楊は台湾の現状に対して述べたのであって、中国大陸とは関係がないと言う人がいたとしても、それは違う！ 彼は台湾で起きた事例を証拠として取り上げ、中国大陸の事例を一切取り上げていないが、彼が語る歴史と現状は、中国人全体を間違いなく指している」。これは「民族の利益やその感情といった全体に関わる重大な問題」であるため、「すべて肯定するか、あるいは、すべて否定する」という「一面的」な態度は、「思想上の絶対化」をもたらし、「実際の状況に合っていない」。趙は、中国人にはもしかしたら「いくらかの醜い習性」があるかもしれないが、決して完全に醜いわけではない、と考えていた。彼は、魯迅の『阿Q正伝』と対比させて、以下のように指摘した。

時代が変わり、社会環境が変わると、人の思想、性格、精神のあり方や生活習慣もこれにともなって変化する。現在の中国人の精神状態は、すでに阿Qの時代とは完全に異なっている。彼らは意気揚々として、自由な思想をもち、勤勉で学問好きで、変革に励み、十分に自信を持って未来へ向かって走っている。数千年来の封建文化の影響は、もちろん短期間で一掃することはできず、しばらくは人びとの生活のなかに残留しているだろうが、封建性はもはや人びとの支配的な性格ではなくなった。台湾に住む中国人が停滞していて封建というものにしがみついて離さないということは、断じてないはずだ！

趙雲怡は、無産階級や社会主義といった中国共産党政権の統治意識にもとづいて、柏楊が描写した醜さは決して中国人の本性ではない、と指摘する。

〔柏楊が醜いと表現していることは〕中国人の本性なのではなく、私有制を基礎とする搾取階級（封建地主階級と買辦資産階級を含む）が持つ階級的な本性なのである。中国、アメリカ、そして世界のすべての国家において、搾取階級の思想的影響が存在していれば、こうした現象が認められるはずであり、中国特有のことではない。逆に、無産階級の思想が主導的地位を占める現在の社会主義中国において、こうした現象が依然と

してみられたとしても、とうの昔から主流ではなくなっており、それどころか、今まさに排斥され淘汰されようとしている。1980年代の台湾の状況がどうなっているのかは分からないが、一つ断言できることは、〔柏楊が指摘した醜い部分〕台湾における中国人の本性などではなく、搾取階級の思想が人びとの脳裏に植え付けられた結果だ、ということである。

そうして彼は、この文章の終わりで、中国の方向性は正しいとして、次のように述べた。

中国は、斬新な容姿で、世界の東方に出現した。中国の人民は、自らの実際の行動をもって、全世界を震撼させるような「誇りに思う中国人」という曲を作った⁽⁴⁶⁾。

続いて、1988年、潘毅華は『醜い中国人』を談ず』を発表し、柏楊の著作を魯迅の国民性の記述と対比させた。潘は、両者がいずれも中華民族を愛護する誠実さから書かれたものであるため、柏楊の『醜い中国人』も肯定すべきだ、と述べた。しかし、この文章をさらに読み進めると、彼は、魯迅の記述でさえ中華民族に一縷の望みを託そうとしたのに、柏楊の「醬缸文化」論にはそうした希望をほとんどみいだせない、と論じているかのようだった。

柏楊の眼からみれば、中国人はみな醜く、大なり小なりのどろどろとした漬物にすぎない。これでどうして奮い立って前進するための力が中国人に与えられようか。誰もが知るように、多くの欠点がある人に対して、もしその人の短所だけをひたすらに指摘して、たとえごくわずかであったとしても、その長所を肯定しなければ、その人が欠点を改善して自信を持つことなど期待できない。私たちは、もし柏楊が自ら中国大陸を一目見たならば、すべての中国人がどろどろとした漬物に成り下がろうとしているわけではないということに気づく、と信じている。改革開放政策が人びとの心に浸透するにつれて、大多数の中国人は、世界の視点から自らの弱点をみつめ、自らの精神状態ともとの心理にある弱点を克服しようと努めているのである。

彼は、柏楊の著作がこのような状況下で広まると、発展的な観点から中国人をみることができなくなり、次のような事態が引き起こされると危惧した。すなわち、〔柏楊の著作が〕「中国の前途に自信を失い、改革開放を傍観しているだけの中国人と正しく向き合えず、民族の自尊心を〔ますます〕喪失させるかもしれない」⁽⁴⁷⁾、と。

このような意見に対して、〔潘毅華の文章と〕同じ論壇で発表された楊永慶「〔柏楊が民族の自尊心を壊滅させる〕という意見に反論する」は、柏楊に代わって懇願しているかのようである。楊によれば、中国には悠久の歴史があり、社会に浸透している惰性や古くさい

思想観念は確かにとても多い。「そのために、1980年代に至ってもなお、魯迅が指摘し批判した、元々の国民性にかかわる多くの病は、いずれも根絶されていないのである。たとえば、神権や皇権に対する畏敬の心理は、文学によってすでに始められた造神運動を加速させ、何千何百年にもわたって人びとの胸の内に醜く存在してきた神々が、ついに1960年代半ばの現実のなかで復活してしまったのである。その結果、空前の民族的災難がもたらされてしまった」⁽⁴⁸⁾。これは、毛沢東が引き起こした文化大革命を暗に皮肉ったようなものである。

柏楊は、1988年、初めて中国大陸を訪問した。彼の訪問の主な動機は、著作権と原稿料の問題を処理することだった。彼は、印税で文学基金会を設立し、中国文化の発展に尽くしたいと表明したそうである⁽⁴⁹⁾。彼の旅程は、10月20日に香港から上海に渡り、5日後に北京、故郷の河南、そして西安へと飛行機で移動するというものだった。もともと武漢や重慶、長江の三峡を訪問する予定だったが、旅の疲労から、西安に12日間滞在することになった。香港のあるメディアは、「醜い中国人」の帰郷」と題する独占インタビューをおこない、柏楊に〔台湾海峡の〕兩岸のどちらが「醜い」のかと質問した。それに対して、彼は、次のように答えた。「中国大陸の『醬缸』の程度は、我われ〔台湾〕よりもかなり深刻である。我われは、今では西洋の影響を受け、少しずつ変わり始めている。我われは、中国大陸の人びとの後進性と閉鎖性を残念に思う」。ところが、興味深いことに、河南の輝県に柏楊の立像が建てられ、彼ははじめこれを撤去すべきだと考えていたが、実際にその銅像が本人の2倍もの大きさであることを知ると、彼は考え方を変えたのだった。「このとき私が頑なに撤去すべきだと言い張ったのは、あまりに捻くれていた。心の中では、私はとても感激していた」⁽⁵⁰⁾。

『醜い中国人』は、1980年代の中国大陸に衝撃を与えた⁽⁵¹⁾。後に中国大陸で柏楊の全集を出版することになる朱洪海は、柏楊が1980年代の中国大陸で勢い盛んだった「文化再考運動」を言論界で加速させた、と述べた。すなわち、彼は、「1980年代人」と呼ぶべきような知識人エリートに強い印象を与え、彼らに人間性の解放と独立を求めるように促した、と評価したのである⁽⁵²⁾。事実、1989年の報道によれば、柏楊の『中国文化の深層構造』と『醜い中国人』は北京大学の学生に大きな影響を与えた、とのことである。その報道では、『中国文化の深層構造』は北京大学の学生の71%が、『醜い中国人』に至っては89%が読んでいた、ということだった。確かに、当時の北京大学の学生は、この2冊が時弊を的確に突いているかという問いに対して、21%しか同意していないが、他方で、47%の学生は、この2冊が中国文化の特色を概ね反映させていると回答していた⁽⁵³⁾。

1989年6月4日、中華人民共和国の首都である北京で天安門事件が発生した。この事件後、柏楊は、民主派人士の釈放を訴える書簡を幾度となく北京に送った。香港の『明報』によれば、柏楊の著作は、人民解放軍が主管する『解放軍報』で批判されたという。その批判は、次のようなものだった。

中華民族の勤勉さ、善良さ、堅実さ、そして民族の気概が、すべて醜さという主題のなかに埋もれてしまった。中国の伝統文化が「醬缸文化」だと喩えられ、中国人を「天下の新鮮な食材を集めたにもかかわらず雑炊となってダメになった存在」と言い切っているのは、この本の最も興醒めな点である⁽⁵⁴⁾。

そして、故郷の銅像も、突如として撤去された。

さらに、柏楊の発言からは、彼が〔中国人という〕民族を愛するが故に中国を批判していたことが分かる。彼は、中国に対して強いアイデンティティを抱いていたものの、その1990年代初頭の発言をみれば、彼が反共の政治的立場を示していたことが分かる⁽⁵⁵⁾。

朱洪海によれば、1990年代の中国は、西洋現代文明の物欲が中国文化を混迷させた時期だった。だからこそ、柏楊は〔1989年の政治的影響を受けて中国大陸で批判されるようになったという〕「特殊要因」のために「1980年代人」には忘れ去られてしまったが、その強烈な印象は1990年代後半から再び注目されるようになった。その際に、彼は、中国大陸での尊厳の価値の再建に大きく貢献した⁽⁵⁶⁾。1999年、上海三聯書店の『書城』は、改革開放20年を記念して、過去20年間に最も影響を与えた20冊という読者投票を企画した。すると、柏楊の『醜い中国人』は、そのなかに選出された⁽⁵⁷⁾。2002年には、柏楊『我われは尊厳ある人生を送らなければならない』が中国大陸で出版され、『醜い中国人』の姉妹編としてもはやされた⁽⁵⁸⁾。

2000年以降、中国が強国として台頭すると、そのことが政治的背景となって、兩岸の交流はますます盛んになった。中国大陸の多くの人びとが、台湾に「柏楊詣」に来るようになった。

湖北で作家業をしていた塗懷章は、2003年に柏楊を訪ねた。塗は、新店の山の上へタクシーで向かう際に、運転手が回り道をした上に道に迷うという不快な経験をした。そこで彼は、柏楊に会った際に、その時のエピソードを『醜い中国人』と結びつけて、「私が思うに、あなたが『醜い中国人』を書いたのは、おそらくその身をもって〔不快な思いをし、そうして〕インスピレーションを得たからでしょう」と述べた⁽⁵⁹⁾。

同年、朱洪海も、シンポジウムに参加するために台湾を訪れた。朱も、この機会を利用して、柏楊に会いにいった。彼は、のちに次のように述懐した。

中国大陸では、柏楊と1980年代は切り離して語れない。1980年代という時代から切り離して柏楊を議論しても、まったく意味がない。我われはまさに1980年代に青春を迎え、柏楊の思想と作品が我われ世代の青年たちに深い影響を与えた。そして、我われ世代が社会の指導層になると、今度は柏楊の思想が社会全体にも影響を及ぼすようになった。私たちは、柏楊に対して、本当に感謝している⁽⁶⁰⁾。

2006年には、北京大学中国文学学部の博士課程院生だった張清芳が、柏楊を訪ねた。その際、張は、柏楊の作品にみられる女性やジェンダー規範の概念について議論したという⁽⁶¹⁾。彼女は、柏楊の『醜い中国人』が1989年に発禁にはなったが、同書入手することはそれほど難しいことではなかった、と記憶していた。『醜い中国人』は、金庸や三毛、瓊瑤の作品と同じように、中国人の学生がみな手に取る書籍だった⁽⁶²⁾。

（二）『醜い中国人』が大国化した中国にもたらした自省と新たな反響

柏楊は、2006年に健康を理由に、作家活動の終了を宣言した。しかし、彼の作品は、中国大陸でますます出版されるようになった。

柏楊の著作の簡体字版を出版契約していた中国友誼出版公司与上海古籍出版社は、コンプライアンス違反を相次いで起こした。そのため、彼の妻である張香華は、中国大陸を奔走し、2004年に古吳軒出版社に対して出版権を正式に認める契約を結んだ⁽⁶³⁾。また、柏楊は、同年、自身の手書き文書や文物を北京の中国現代文学館に寄贈した。彼は、中国現代文学館にその著作が収蔵された初の台湾作家となった。それらは中国大陸で数多く出版され、映像作品も企画された⁽⁶⁴⁾。

柏楊は2008年に逝去したが、『柏楊全集』簡体字版が2010年に人民文学出版社から初めて出版された⁽⁶⁵⁾。その記念出版会では、研究者の金宏達が、柏楊の中国大陸での影響力について言及した。金は、『醜い中国人』を取りあげて、同書には中国人を曲解し卑下することで中国人の努力を促そうとする意図があった、と指摘した。これに対して、妻の張香華は、「社会は変化し、時世も移り変わる。私は、今なら彼が『醜い中国人』ではなく『尊厳のある中国人』を書いたであろうと信じている」と述べた⁽⁶⁶⁾。

当時、中国図書商報と中国出版科研所は、過去60年間で最も影響力のあった600冊という選書キャンペーンを隔年でおこなっていた。そこでも『醜い中国人』は、2009年に入選した⁽⁶⁷⁾。なお、興味深いことは、この年にインターネット上で「中華人民共和国成立後の60年間で最もつまらなかった10冊」というキャンペーンがおこなわれ、『醜い中国人』は「時代遅れ」という理由でここでも入選したことである⁽⁶⁸⁾。

このような『醜い中国人』に対する中国大陸での正負両面の評価は、中華人民共和国の大国化とも響きあうものだった。

2007年、浙江省の高校生だった張秋萍は、中国人が豊かになって海外旅行に行くようになったものの、文明的でない習慣も海外に持ち出されてしまった、と自国の人びとの行動を反省した。張は、2004年のSARSの感染を具体例とした。彼女は、どこでも唾を吐くという中国人の行為がSARSの感染を広めたと聞いて、そのような行為を『醜い中国人』の記述と結びつけたわけである⁽⁶⁹⁾。

2008年、オリンピックが中華人民共和国の首都である北京で開催された。これは、中国

で初めて開催されたオリンピックであり、中華人民共和国が西洋の秩序のなかで西洋に追いついたということの意味した。四川大学歴史文化学院の准教授で台湾出身の呉銘能は、北京オリンピックに対して抱いた中国人としての光栄感とそこに至るまでの自己否定的な歴史観に共感し、それらの感情を台湾での投書に記した。さらに、呉は、中華人民共和国が「ますます」大国化するだろうと予測した際に、張秋萍と同じように、『醜い中国人』に言及したのだった⁽⁷⁰⁾。

ところが、台湾で育ち、その後に中国大陆で文化人として成功を収めた梁文道は、北京オリンピックの開催と中国人の品性をめぐって論争を繰り広げると、柏楊をはじめとする民族性に関する議論を脱構築しようとした。梁文道は、民族性を論じた書籍に対して若い頃には反発したが、徐々に受け入れるようになり、やがて反省の材料として活かすようになったという。梁によれば、これらの書籍はどれも似たようなものだった。実際、梁啓超の『新民説』や魯迅の『阿Q正伝』などは、民族性を論じた書籍と大差がない。すなわち、彼によると、民族性に関する記述は、決して厳密な思考を経てなされたものではなく、その歴史を遡ってみれば、帝国主義が最盛期だった頃の産物でしかなく、本質性という構造を通して植民者の優越性と権威を打ち立てようとする類のものだった。彼の結論は、「民族性という記述の誘惑は、それが手軽で便利なことにある。私は、柏楊の勇気を尊重し、彼の啓蒙に感服している。しかし、私は、彼のもたらした誘惑を必ず避けなければならない」というものだった⁽⁷¹⁾。

他方で、共産党政権に異議を唱えた民主派人士の余杰らは、柏楊の批判を継承しながら、中国の政局を批判する著作を書き続けた。彼は言う。「柏楊に敬意を表したい。なぜなら、彼のお陰で、私は『醜い中国人』に匹敵するかそれを超える著作を世に出せたからである」⁽⁷²⁾。

インターネット上のサイトやメディアのプラットフォームがさまざまに発達した今日、私は、『醜い中国人』に関する議論がYouTube上にあるかどうか調べてみた。すると、中華人民共和国の出身者でフランスに滞在している『文匯報』の記者鄭若麟の動画があった。

鄭若麟は、2018年のこの動画のなかで、復旦大学中国研究院の연구원として、新時代の中国人の尊厳と自信について語っていた。若い頃に『醜い中国人』を愛読した鄭は、西洋の標準で自らをみつめ、西洋の標準を追い求めるようになった、という。しかし、近年の中国は大国化して、中国人が自国に対して自信を持つようになったにもかかわらず、中国人の西洋に対する理解は依然として不足している、とのことだった。彼は、中国人は使い慣れた望遠鏡や顕微鏡で西洋を認識できないため、「透視レンズ」で西洋を認識しなければならない状態だ、と主張する。たとえば、彼は、自らがフランスで得た知見から、三権と民主制度について、それぞれ次のように述べている。西洋人の考える三権とは、彼らが東洋にもたらした立法と行政と司法ではなく、政権と資本主義と大衆メディアのことである。また、EUの意思決定システムは非常に緻密で、各国の票数が過半数必要だけでなく、

投票した国の人口の過半数を超えなければならないという「二重の多数決制」であるが、西洋が西洋以外の国にもたらした民主制度はほぼ失敗している。

つまり、鄭若麟は、視聴者に対して、自らが勝手に想像する完璧な西洋を追い求めてはならない、と呼びかけているのである。鄭は、三権や民主制度などについて言及した類似の記述を柏楊の『醜い中国人』からみつけ出し、柏楊が求めた西洋とは表面的なものに過ぎず、浅い西洋理解でしかなかった、と指摘した⁽⁷³⁾。

確かに、鄭若麟は、西洋文明を批判的にみつめようとしている。しかし、〔鄭の奥底にある西洋に対する〕態度は、中国の伝統や中華文明に対する自信過剰な気持ちの表れである。私たちは、ここから、新時代の中国の人びとの自信をうかがい知れるだろう。

以上から分かるように、中華文明に対する自省としてであれ、西洋文明に対する反省としてであれ、中国大陸の言論界は、基本的には『醜い中国人』を「我われのこと」として真剣に取り扱い、あるいは反応したのだった。

しかし、私は、YouTube 上でこれらとは異なる意見をみかけた。

2019年、インテリ系インフルエンサーとして知られる薩莎は、中国大陸の多くの「国粉」〔中華民国ファン〕が盲目的に中華民国や台湾を推し崇め、現在の中華人民共和国を貶めていると批判し、中華民国ファンの文章からは「酸っぱい悪臭がする」と述べた。彼は、柏楊の『醜い中国人』にある「中華民国人」や「内輪揉め」や「醬缸」をめぐる醜態はいずれも本質をついている、と主張した。彼は、同書のタイトルは中国人となっているが、実際に描かれているのは「中華民国人」であるとして、次のように主張した。『醜い中国人』に「通底するロジック」〔としての中国〕は、柏楊が1920年代から1949年にかけて中国大陸で過ごした中華民国であり、1949年以後に生活した台湾の中華民国である。彼は、1980年代末まで、中華人民共和国で一日たりとも過ごしたことはない。それゆえ、「彼は中華人民共和国人がどのように考えるのか理解していない。彼が書いたのは中華民国、括弧付きの台湾である」。この「通底するロジック」は、誰にも覆せないだろう。だからこそ、『醜い中国人』とは、『醜い中華民国(台湾)人』の略称なのだ、と。さらに、彼は、動画の最後で、「内輪揉め」や「ほら吹き」などの言葉で台湾の選挙文化を揶揄した。「〔柏楊が〕1985年に『醜い中国人』を書いて 中華民国を見切ったのに、なぜ今も中華民国を好む人間がいるのだろうか」、と⁽⁷⁴⁾。

この事例からは、私たちがすでに議論してきた、次の点を想起せずにはおれない。それは、中国大陸の人びとが『醜い中国人』に反響を寄せた時、おおむね「我われのこと」として取り扱ったが、同書は1960年代の台湾社会を背景として執筆され、柏楊自身も中華人民共和国の中国大陸では長らく暮らしたことがなかった、という事実である。つまり、自他を識別するための要件が明確には存在しないのである。しかも、何らかのロジックや言語環境の下では、中華人民共和国と中華民国あるいは中国大陸と台湾が2つの異なる国家ないしは共同体なのかを議論する際に、『醜い中国人』そのものがキーワードに成り得るの

である。実際、このような状況は、1990年代以降の台湾社会で発生したのだった。

第四節 台湾社会の変遷——「我われのこと」から「彼らのこと」へ？

(一) 台湾人アイデンティティの増大

柏楊の記述は、台湾で生み出された。しかし、その記述が世に問われて間もなく、台湾社会は巨大な変化を経験することになった。それは、国立政治大学選挙研究センターが1990年代初頭から実施している政治的アイデンティティに関する調査に示されている。この調査では、「台湾人であり、中国人ではない」とする台湾社会のアイデンティティが1990年代初頭の17.6%から1990年代末の36.9%まで上昇したことが分かる。さらに、その比率は2000年以降も大幅に上昇し、2008年に48.4%に達して以降、「台湾人であり、中国人ではない」との回答が「台湾人であり、中国人でもある」との回答を安定して大幅に上回るようになり、この回答に示されるアイデンティティが台湾社会の多数派を占めるようになった。2020年以降は6割にまで達し、2023年の比率は62.8%だった⁽⁷⁵⁾。

国民党の権威主義体制下で制限を受けながらも、台湾人を共同体の特色とし、台湾人が共同体の理想だとする主張は、1980年代の台湾で党外雑誌が出現したことにより、公然のものとなった。1990年代に台湾の政治と社会がますます民主化すると、こうした主張はさらに活発化し、多くの文章や書籍が生み出された。

確かに、1990年代以降、台湾人のアイデンティティが次第に勢いを増すなかにあっても、中国人アイデンティティを議論する空間は台湾社会に存在し、「醜い中国人」の語を使って社会の風潮を批判する意見も依然としてみられた⁽⁷⁶⁾。しかし、この頃から、明らかに、新しい方向性として台湾人〔という表記〕が登場した。とりわけ、李喬の『台湾人の醜い面』、苦苓の『醜い台湾人』⁽⁷⁷⁾は、いずれも柏楊の『醜い中国人』を意識したものだ。〔これらの書籍は『醜い中国人』と同じ意図で出されたのであり、〕それらが警鐘を鳴らす対象が台湾人へと変化しただけだった。

李登輝総統の1990年代に、中華民国の政治は民主化し本土化し、台湾社会は自由化し多元化した。1990年代は台湾人アイデンティティが次第に増大していった10年であり、この10年は柏楊の人生にとっても「人権の十年」と位置づけられる時期だった。柏楊は、李登輝施政下の台湾社会について、以下のように述べた。

少なくとも、現在の台湾にある中華民国は、中国の歴史上最も良い時代である。誰もが発言でき、誰もが批判でき、その上、〔突如として〕玄関口にやって来たジープ車に連れ去られるような事態を恐れる必要もない。これは李総統の人権に対する最大の貢献である⁽⁷⁸⁾。

2000年、中華民国の政権交代が実現し、民主進歩党の陳水扁が総統に就いた。陳水扁総

統は台湾の主体性を施政方針として掲げたが、それは反対派からの批判にもさらされた。2004年に陳水扁が総統に再任されると、親中寄りの『中国時報』は蔡志浩の時事評論を掲載して、台湾の主体性に異論を唱えた。蔡は、まず、「20年前の台湾はまさに戒厳令を解除しようとしていた移行期にあたり、多くの変化の可能性があった」と指摘し、柏楊の『醜い中国人』と龍応台の『野火集』が台湾社会の自省を反映した、と述べた。しかし、現在の台湾では、「自らを愛する」ことが「現実から離れた自惚れ」へと変質してしまった。台湾がどんなに経済を発展させ、科学技術を進歩させようとも、社会と文化は後退してしまい、里長から総統まで、そして、市井の小市民からテレビ番組まで、台湾人には欠点がないものと思込んで他者を批判するばかりとなり、自省して自己批判することがなくなってしまった⁽⁷⁹⁾。

こうした見立ては、蔡志浩だけではなかった。台湾の主体性を冷ややかにみていた『聯合報』に投書した張佑生も、同じように感じていた。張は、民進党政権下の台湾社会を風刺して、次のように述べた。

「人權立国」だの「法治国家」だのと一日中唱えているが、社会にはなおも外国人労働者に対する差別や公共の安全、あるいは特権をめぐる問題が残っている。これらのことは、執政者がいくら「脱中国化」を策動したとしても、[台湾人が] その内心で5千年にわたる文化的なアカを継承していることを示すものである。柏楊の名著を『醜い台湾人』と改題するだけで時勢に合わせるができるが、[台湾人は] その攻撃にさらされる心の準備をしているのだろうか⁽⁸⁰⁾。

(二) 柏楊没後の未亡人の選択

2008年、柏楊が耕莘医院にて病没した後、多くの追悼文が文壇で発表された⁽⁸¹⁾。「郭衣洞（柏楊）弟兄追思会」が彼の生涯をまとめた「柏楊を追憶し、柏楊の著作を読む」と題された文章は、のちに『国史館館刊』に「郭衣洞（柏楊）先生の生涯」として収録された。このなかで、生前の柏楊が「河南省の輝県から台湾に来た第一世代の移民だ」と自称し、その後、台湾に根を張って台湾人になったと語っていたことが記されている⁽⁸²⁾。今の私たちには、柏楊の「台湾人になった」という発言にネーションの意味が含まれていたのかどうかを確認する術がない。彼の著作は、ナショナル・アイデンティティの面からみれば、大中華や中国人にやや偏っていると言えるが、それでも、柏楊は、その言論活動によって投獄され、晩年には人権のために発信し続けたことから、台湾社会では「人権闘士」としてイメージされるようになった。このようなことからすれば、彼は、台湾人アイデンティティが論じられる際にとりわけ重視される民主的価値とは矛盾せず〔台湾人というアイデンティティを抱きつつあったのではないかと推測される〕。

柏楊の遺灰は、生前の希望によって、緑島の海上に撒かれた⁽⁸³⁾。しかし、すべての遺灰

が撒かれたわけではなかった。2010年の報道によれば、未亡人の張香華は、北京で人民文学出版社の『柏楊全集』出版イベントに参加した際に、『醜い中国人』の印税収入を青海地震の復興のために寄付することを公表したほか、柏楊の遺灰の一部を故郷の河南に安置したいと希望した、と言われている⁽⁸⁴⁾。その後、中国政府と中国大陸の親族による手はずのもと、彼の遺灰は河南省鄭州市福寿園墓地に安置され、『醜い中国人』(1998年の簡体字初版)も娘の崔渝生によって納められた——彼の文物の一部も同地で展示されている⁽⁸⁵⁾。

柏楊が没した後、張香華は、しばしば自らの立場を表明するようになった。

柏楊没後十周年を迎えた2018年、ある記事は次のように指摘した。『醜い中国人』は、かつて兩岸で反響を引き起こした。[しかし、その後の状況は、兩岸で異なっている。すなわち、]台湾ではかつて多くの党外人士が啓蒙を受けてきたのに対して、中国大陸では今もなお柏楊を啓蒙者として認識しているのである。したがって、張香華は、中国大陸では、柏楊の著作に対する検閲は一般的な用語の調整程度で[彼の著作の意図も伝わる状況に]あるが、台湾では、柏楊についてそもそもほとんど語らなくなり、そのような状態は台湾の作家と作品が言論の自由を主張するための道具として「移行期正義」のためだけに「利用される」ようになったからだ、と[不満げに]述べた⁽⁸⁶⁾。

張香華は、さらに、2020年のインタビューでも、次のように不満を露わにした。台湾人の多くは柏楊を「エッセイスト」としかみていないが、中国大陸では歴史家として認められている。つまり、彼の著作に対する兩岸の動向を確認する限り、柏楊への敬意は「台湾では消えつつあり、中国大陸では拡大している」。事実、中国大陸では、柏楊の著作は、異なったジャンルの出版物やクリエイティブな商品あるいはTikTok上でしばしば紹介されている。ところが、これとは対照的に、台湾では、「柏楊が述べた「醬缸文化」やその他の「柏楊曰く」のさまざまな言説が台湾社会の進歩に対して貢献し、それらが消えてなくなったわけでもない」のに、「柏楊はまるで歴史から抹消されてしまったかのようなのである！」⁽⁸⁷⁾。

張香華は、2021年、台湾の教科書出版社である龍騰文化社から『醜い中国人』の抜粋を中学1年生の国語教材に採録できないかとの問い合わせを受けた、と公表した。しかし、張は、「当初、柏楊が1984年に講演した際、その主要な対象は成人だった。そのため、民族の自信をまだ確立していない中学1年生に対して、[同書は]適切ではない」と考えられることから、同書の発行を永久に停止するとした。

張香華は、民進党政権による文語文の削減や、東アジア史を中国史に取って代わらせる「脱中国化」、さらには反中的な教育政策には賛同できないとの立場だった。台湾において中国文化のアイデンティティが欠乏し、中国文化に対する認識が欠乏しているという前提の下では、柏楊の文章がたとえ読まれたとしても、その精神を理解することはできない、と考えられた。彼女によれば、1988年に中国大陸を訪問し、それまで会ったことのなかった民衆たちに取り囲まれた際、その面持ちは死を恐れ助けを求めるものだった。しかし、2021年の今日では、中国大陸の文明はすでに「食事もある」し、「トイレもある」ところま

で進歩している。そのため、柏楊の遺言に従って、同書は二度と出版されないことになった、というわけである。彼女は、台湾の遠流出版社および中国大陸の人民文学出版社との契約が2024年に満期を迎えた後、同書を再発行しないと表明した。彼女は、台湾の読者が歴史家としての柏楊が執筆した『柏楊版資治通鑑』を通じて中国の歴史を認識するべきだ、と考えた⁽⁸⁸⁾。

張香華は、柏楊を記念する各種のイベントにおいて、親中メディアの『中国時報』や中華人民共和国のメディアの取材をしばしば受け入れてきた。現在知られている張香華の『醜い中国人』の再発行停止声明に関する公開映像は、中国大陸のメディアの独占取材を受けたものである。彼女は、そこで、以下のように自身の見解を述べている。

中国人が歴史のなかで今日のようなところまで到達するのは、本当に容易ではありませんでした。他の国家が私たちを苛めようとしたが苛めきることはできず、それは非常に困難なことでした。私たちが今日有している地位と状況は、歴史的にみれば非常に得難いものです。それは、全国の人びとと国家全体の努力があって、初めて得られた進歩なのです。

張香華は、台湾が一方では経済面で中国大陸から多くのメリットを享受しておきながら、一方では懸命に排斥しようとしていることについて、「人の道」に反すると批判する。そして、兩岸が円満に共存し、平和な未来に向かうことを期待する⁽⁸⁹⁾。

私の考えでは、『醜い中国人』のなかの文章は、民族に関する論述が虚実ないまぜで、厳格ではなく、誤解を生みやすいため、国民の義務教育のなかに組み込むことは、確かに適切ではない。しかし、張香華の論点はそのところにあるのではなく、中学1年生は「民族の自信」を確立できていないという点にある。張の言う「中国」には、潜在意識のなかに中華民国が含まれておらず、強国として台頭した後の中華人民共和国のみを指している。彼女は民進党政権の「脱中国化」を批判するが、実は、台湾社会で深刻化しつつある「中国を侮辱する」という行為が、無意識のうちに、台湾を中国という枠組みの外側に追い出してしまっている。

張香華の声明が発出された後、中国大陸のインターネット上には、多くの議論が現われた。しかし、台湾では、出版社や新聞で多少の波風が立っただけで、社会全体の注意を引くことはほとんどなかった⁽⁹⁰⁾。逆に、台湾の主体性を比較的重んじる立場の『自由時報』では、張香華の声明に対して、多くの嘆きや疑問の声が投げかけられた。ただし、『醜い中国人』が1960年代の台湾社会の日常生活に基づいていたことに鑑みれば、それらの言論がピントを外していると思われても仕方ないだろう。

明石靖「『醜い中国人』は本当に読めないのか？」というエッセイは、張香華の見解には同意しない。彼は、柏楊の『醜い中国人』は『柏楊版資治通鑑』よりも実用的な価値があ

るとした。なぜなら、前者は現在の中国人の文化を批判しているのに対し、後者が批判するのは過去のことだからである。さらに、中国近代史における国共両党のイデオロギー闘争によって台湾〔中華民国〕の敵国となっている中国〔中華人民共和国〕が、いまだに一党支配をおこない、それどころか帝政に回帰していることは、いちいち中国人の醜さを印象付けるものである。そのため、彼は、もし教育において次世代に独立した思考能力や批判能力を求めるのであれば、学生が閲読するのを禁止すべきではない、と主張した。張香華の今回の行動は「中国の報復をひどく恐れた」もので、「玄人からは笑いものにされ、自らの格を貶める」のではないかと。彼は、張香華の「脱中国化」教育政策に対する批判にいちいち反駁し、「食事もある」し、「トイレもある」ことは「最も基本的な生活上の必要」であり、どの国家であっても達成すべき「最低限の要求」でしかない、と述べる。中国の専制独裁は、柏楊が主張した民主制度と明らかに衝突しているのだから、「民主的で自由な国土に暮らす台湾人ならば、なおさらこの本を読めば、中国のことを理解できるのではないか」⁽⁹¹⁾。

著名な詩人である李敏勇も、「醜い中国人」というエッセイで次のように指摘する。民族の劣等性を論じる『醜い〇〇人』という本は、どの国や民族にもみられるものだが、それは自己批判と反省を表し、文化の進歩性を反映したものである。たとえ張香華が再発行を不許可としても、『醜い中国人』は多くの人や図書館の書棚にまだある⁽⁹²⁾。李は、1週間後、再び「台湾人にもまた、醜い一面がある」と題したエッセイを寄稿した。このエッセイで李は、頻繁に発生する交通事故を例に、「台湾で最も美しい風景は人である」との見方を冷徹に検討し、それは一種の社交辞令的な賛辞に過ぎない、と指摘した⁽⁹³⁾。李は、醜さを批評されるのは中国人に特有のことではなく、台湾人にも醜い一面があると表明したわけである。しかし、〔私たちは、このエッセイが〕そのように指摘することで、両者の間に境界線が引かれている、と読むこともできるだろう。

この2人の文章に加え、私がフェイスブックなどのSNSで目にした観察や発言をみる限り、多くの意見は『醜い中国人』を「彼らのこと」だという前提の下で、その発行を継続すべきと主張している。これは、柏楊が同書を執筆した当初の意図と明らかに一致していない。台湾のアイデンティティが台湾社会のなかで徐々に根を下ろしつつある現在、『醜い中国人』を他人事のように扱う風潮は、同書がもともとは絶対的で単一の自省の尺度でしかなかったのに、異質な他者を検証するための視角に切り替わりつつあることを示している。

おわりに

本論は、台湾と中国大陸の華人社会を主な対象として、柏楊『醜い中国人』が引き起こした反応と波紋について、初歩的かつおおまかな考察をおこなった。

この手の民族性に関する議論を検討する際、無視することができないのは、賛美か批判

かにかかわらず、それらはいずれも一種の文化ナショナリズムの表れた、ということである。それらは一見すっきりしていて、便利で、私たちがいる民族の特質を素早く把握する助けになるように見える。

しかし、厳格さに欠け、事例の選択にもバランスを欠くような、本質主義的な議論の組み立てでは、かえって浅薄な認識や偏見、誤解を招きかねない。ベネディクト・アンダーソン (Benedict Anderson, 1936-2015) の『想像の共同体』(*Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, 1983), エリック・ホブズボウム (Eric John Ernest Hobsbawm, 1917-2012) 『創られた伝統』(*The Invention of Tradition*, 1983), 小坂井敏晶 (1956-) の『民族という虚構』(2002) などの著作が次々と出版されたことで、私たちは民族ないし国民といった一見すると本質的な概念の多くが、実は構築された産物でしかないとの理解を深めてきた。

それでもなお、私は、民族性に関する議論を研究することに依然として価値がある、と考えている。『醜い中国人』は、その構想とテーマにおいて、『醜いアメリカ人』および『醜い日本人』の影響を受けている。日本の社会学者吉野耕作 (1953-2018) は 1970 年代から 1980 年代の日本の読書市場に大量に現れた「日本人論」について研究し、成果をまとめた。吉野の分析によれば、「日本人論」はしばしば作者個人の経験や見聞、あるいはイデオロギーのみから出発し、作者に都合の良い現象や事案を選びすぐって「理論」を形成するため、方法論が欠如しており、学術的価値がない。ただ、彼は、必ずしも批判や否定の角度からのみ、これらのテキストを読む必要はないとして、どのような読者にどのように読まれたのかをさらに検討し、比較の観点を加えることで、議論の可能性が広がる、と述べている。彼は、以下のような方法を具体的に提起している。

- (一) 異なる知識人や文化エリートが異なる歴史段階や状況下で形成した「民族独自論」を比較する。
- (二) この知識生産が社会のなかで吸収され消費される過程を検討する。
- (三) 国家ではなく市場の角度から、これらの言論が再生産され消費されるメカニズムを検討する。
- (四) 上述の 3 点に基づくことで、「創造型ナショナリズム」(国民のアイデンティティを創造することを目標とするナショナリズム) と「再構築型ナショナリズム」(国民がすでに存在する状況下でのネーションの維持、促進、強化を図るナショナリズム。吉野は「日本人論」およびその背後にある文化ナショナリズムは後者に属すると考えた) を比較する⁽⁹⁴⁾。

本論は大まかな考察に過ぎないが、私は、『醜い中国人』が上述の研究方法に適した対象だと考えている。同書は、「中国人」という民族を前提として「私たちのこと」を論じたものだが、実際に焦点が当たっているのは、歴代の中華王朝の歴史的背景と中華人

民共和国から漏れ伝わる間接的な情報か、それらを除くとするならば、[当時の台湾の人びとが] 直接向き合い、観察できる事実だった。すなわち、当時の国民党政権が打ち立てたイデオロギーやその官僚文化、あるいは、1960年代の台湾社会の日常生活だった。

しかし、それらが1980年代に単著としてまとめられ、世に問われることになった時、台湾社会はまさに変化の真ただ中にあり、中華民国の政治体制は1990年代に大きく変化した。若林正文が蕭阿勤の研究を引用しながら指摘したのは、1970年代の「現実への回帰」から1980年代の台湾ナショナリズムへという思潮の変化には実は飛躍が存在していること、つまり、後者は決して前者の必然的な帰結ではなかった、ということである。国民党の公式イデオロギーとは異なる中国ナショナリズムにも民主化運動に賛同する動きが含まれていたが、その後の[台湾の] 党外運動をリードしたのは、結果的には台湾ナショナリズムだった。裏返して言えば、非国民党の中国ナショナリズムは、党外運動のなかで急速に周縁化したのである⁽⁹⁵⁾。

したがって、『醜い中国人』は、ある特定の言語環境や時代状況もしくは特有の文脈のなかで、戦後台湾社会が生み出した一種の「台湾人論」だったと読むことは可能かもしれない。しかし、1990年代の台湾社会では、実は、台湾人という共同体の特性を追究しようとした著作が現れ始めていた。

こうした変化のなかで、柏楊は、人権派というイメージによって、台湾社会から次第に「私たちのこと」として記憶されるようになった。ところが、『醜い中国人』は、必ずしもそのような扱いを受けなかった。近年、張香華の発行停止声明が波紋を広げた際にも、多くの意見は、明らかに、同書を「彼らのこと」として論じていた。

これに対し、『醜い中国人』が同時期の中国大陸で引き起こした反応は、台湾で引き起こしたそれとは明らかに異なる。賛美か批判かにかかわらず、大多数のコメントは、同書を「私たちのこと」として受けとめた。もちろん、『醜い中国人』が書かれたのは国民党統治下の中華民国であり台湾社会であったことから、中国人と異質な他者を区別するための要素が同書には幾ばくか含まれている、との反応もみられた。

『醜い中国人』は、さまざまな読み方と解釈を可能にする。同書は、時代を取り巻く文脈に応じて、地域や省籍や国境を越えて、さまざまな議論を引き起こす。2024年を迎えようとする現在、『醜い中国人』をめぐる議論は、兩岸の華人社会でどのような着地点を見出すのだろうか。あるいは、変数が存在し続けるのだろうか。すべてはまだ幕を閉じていない。私は、観察を続けることで、本テーマを完成させたい。

注

- (1) 柏楊『醜陋中国人』(台北: 林城出版, 1985年〔初版〕)。
- (2) 下記に列記しておく。まず、向陽「猛撞醬缸的虫兒——試論柏楊雜文的文化批判意涵」、梁敏兒「共同体想像——柏楊筆下的国民性」、周裕耕「柏楊——非貴族的知識分子」、Aleksander Petov,

- “Bo Yang’s The Ugly Chinaman: Generic and Comparative Perspective”である。以上は、いずれも、黎活仁等主編『柏楊的思想与文学——「柏楊思想与文学國際學術研討会」論文集』（台北：遠流出版，2000年）に収録されている。つぎに、陳曉明「世俗批判的現代意義——試論柏楊雜文的思想品格」，普舍奇「柏楊对人性的看法」，王勇「超越時空与国界的心靈覺醒——柏楊与菲律賓民族英雄扶西·黎薩 (DR. JOSE RIZAL) 思想批判性比較之我見」，朱洪海「柏楊思想对中国大陸「八十年代人」的影響」である。以上は、いずれも、李瑞騰主編『柏楊文学史学思想國際學術研討会論文集』（台北：行政院文化建設委員会，2003年）に収録されている。
- (3) 方玫瑰「不同的切入 相同的柏楊——「柏楊与中国文化研討会」紀実」（『明報月刊』2005年1月号），陳文芬「西安陝西師範大学図書館十月十五日舉辦「柏楊与中国文化」研討会」（『聯合報』2004年10月24日）第6版。
 - (4) 陳聖屏『柏楊的社会与文化論述，1960-2008』（台北：国立台湾大学歴史学系博士論文，2013年）。
 - (5) のちに、張清芳『中国文化現代化的別類思想体系——以柏楊其人其文為考察中心』（北京：北京大学出版社，2012年）として公刊された。
 - (6) 應鳳凰「猛撞醬缸，帶箭怒飛——回顧柏楊一生的写作歷程」（『文訊』第272期，2008年6月），陳聖屏「柏楊的醬缸文化論述，一九六〇至一九六八」（『思与言』第49卷第1期，2011年3月），向陽「「醬缸」文化的批判者——柏楊与《醜陋的中國人》」（『文訊』第318期，2012年4月）。
 - (7) 林淇養編選『台湾現當代作家研究資料彙編19 柏楊』（台南：国立台湾文学館，2012年）。
 - (8) 楊明怡「10年回首憶柏楊 学界讚美实践型知識分子」（『自由時報』電子版，2018年4月30日，<https://art.ltn.com.tw/article/paper/1196465>，アクセス日：2023年8月26日），徐榮昌「特集——記北京柏楊逝世十周年學術研討会」（『明報月刊』2018年10月号）。
 - (9) 「柏楊『醜陋的中国人』2024年後不再發行」（『聯合新聞網』電子版，2021年11月18日，<https://udn.com/news/story/7331/5899078>，アクセス日：2021年12月21日）。
 - (10) 前掲『醜陋中国人』15頁。
 - (11) 「寒爵」（李瑞騰主編『2009 台湾文学年鑑』台南：国立台湾文学館，2010年）。
 - (12) 寒爵「醜陋的中国人」（『中国時報』1972年9月25日）第12版。
 - (13) 周賢頌「讓我們勿做醜陋的中国人」（『聯合報』1978年11月18日）第3版。
 - (14) 何凡「以国家代表自居」（『聯合報』1978年11月21日）第12版。
 - (15) 周賢頌「怎麼辦？ 即刻辦——辦与不辦」（『經濟日報』1978年12月20日）第2版。
 - (16) このほかにも、次のようなものがある。一市民「平常注意生活細節 不要把人丟到外国」（『聯合報』1978年11月24日）第3版，黑白集「觀光与出醜」（『聯合報』1979年4月2日）第3版。
 - (17) 光遠「申請觀光護照限次索解」（『經濟日報』1978年11月27日）第7版。
 - (18) 李亦園・楊国枢「新版序」（李亦園・楊国枢主編『中国人的性格』（台北：桂冠圖書出版，1988年）9-10頁）。
 - (19) 「在社会化過程中壓抑個人自主中国人性格与現代社会難相容楊国枢初步研究分析国人性格特徵」（『民生報』1984年1月10日）第9版。
 - (20) 前掲「新版序」9-10頁。
 - (21) 「華人本土心理研究基金会」（<http://www.indigpsych.org/publications?scope=chinese>，アク

セス日：2022年5月19日)。

- (22) 関連する研究として、李福鐘「蔣威權体制特性再探——從柏楊案談起」(『国史館館刊』第69期, 2021年9月)がある。
- (23) 王蘭芬「全集發表 柏楊感謝事業伴侶王榮文」(『民生報』2003年10月18日)第A13版。
- (24) 田炎欣「柏楊——中国文化缺少「人權」基因」(『聯合晚報』1994年5月15日)第3版。
- (25) 前掲「猛撞醬缸的虫兒」39頁。
- (26) 柏楊『柏楊回憶錄』(台北：遠流出版, 1996年)237-238頁。
- (27) 李文輝「批判世俗醬缸 柏楊只為蒼生說人話」(『中国時報』2023年3月20日)第A4版。
- (28) 柏楊『醜陋的中国人』(台北：林白出版, 1985年)第5版。
- (29) 「文教記者服務最佳「反敗為勝」最具影響力出版界大事 金石堂選出」(『民生報』1985年12月27日)第9版, 「高三學生閱讀 受排行榜影響 女生偏愛文學 男生涉獵較廣 心目中合理書 價與售價極接近」(『民生報』1986年8月14日)第9版, 「文化新聞版 女青年愛看那些書? 緣與命 地理雜誌 最受歡迎」(『民生報』1988年1月25日)第21版。
- (30) 前掲『醜陋的中国人』22-23頁。
- (31) 前掲「猛撞醬缸的虫兒」33-34頁。
- (32) 前掲「柏楊」69頁。
- (33) 前掲『醜陋的中国人』18頁。
- (34) 前掲『醜陋的中国人』20頁。
- (35) 前掲『醜陋的中国人』20頁。
- (36) 前掲「柏楊」72-74頁。
- (37) 柏楊『醬缸震蕩——再論醜陋的中国人』(台北：星光出版, 1995年), 柏楊『醜陋的中国人(2008紀念版)』(台北：遠流出版, 2008年), 柏楊[MOMO作画]『醜陋的中国人(漫画版)』(台北：遠流出版, 2009年)。
- (38) 張夢瑞「醜陋的中国人 十年後續集出爐」(『民生報』1995年8月11日)第15版。
- (39) 多くの書評がやはり前著を主要な対象とした。張淑敏「?的中国人——評〔柏楊〕『醜陋的中国人』讀後」(『書評』第9期, 1994年4月)16-19頁, 錢佳燮「評〔柏楊〕『醜陋的中国人』」(『孔孟月刊』第37卷第7期, 1999年3月)31-40頁。
- (40) 李敖『醜陋的中国人研究』(台北：桂冠出版, 1995年)。
- (41) 「面對張小燕 傅聰 話匣開 接觸戀愛史 就從手開始」(『民生報』1987年5月7日)第4版。
- (42) 「多管閑事」(『聯合報』1987年12月3日)第8版。
- (43) 「台視晚間10點10分談笑書聲說「醜陋的中国人」」(『民生報』1994年4月3日)第13版。
- (44) 黃菊「『醜陋的中国人』日語本躍入暢銷榜」(『中国時報』1988年4月27日)第63版。
- (45) 公開情報によれば, 同書を発行した出版社は, 花城出版社(1986年), 湖南文藝出版社(1986年), 時事出版社(1986年), 時代文藝出版社(1987年)などだった。
- (46) 趙雲怡「評『醜陋的中国人』」(『貴陽師專學報』1987年1月号)54-59頁。
- (47) 潘毅華「談『醜陋的中国人』」(『雲南師範大學學報(哲學社會科學版)』1988年5月号)88-90頁。

- (48) 楊永慶「対“柏楊毀滅民族自尊心”の異議」(『雲南師範大学学报(哲学社会科学版)』1988年5月号) 90頁。
- (49) 許主峯「柏楊將往北平領稿費——中共大量盜印台灣出版品蔚為風氣」(『財訊』第73期, 1988年4月), 陳平芝「柏楊返鄉——解決版稅與稿費」(『聯合晚報』1988年9月10日) 第8版, 「所得將設獎項鼓勵年輕作家向大陸要版稅聽聽暢銷作家怎麼打算」(『聯合報』1988年10月23日) 第3版。
- (50) 「一個『醜陋的中国人』回来了」(『中国時報』1988年11月23日) 第5版。
- (51) 徐開塵「柏楊啓蒙80年代大陸學子」(『民生報』2003年10月20日) 第A6版。
- (52) 前掲「柏楊思想对中国大陸「八十年代人」的影響」。
- (53) 「北大多數學生——肯定中国文化」(『聯合報』1989年4月13日) 第9版。
- (54) 「解放軍報批判楊銅像拆了」(『聯合報』1991年6月9日) 第9版。
- (55) 「中国人的天空——柏楊, 陳其南, 龔鵬程看兩岸文化交流」(『遠見雜誌』第84期, 1993年6月)。
- (56) 前掲「柏楊思想对中国大陸「八十年代人」的影響」331-332頁。
- (57) 徐開塵「大陸票選影響最大的20本書『鄧小平文選』名列第一」(『民生報』1999年3月20日) 第19版。
- (58) 前掲「柏楊思想对中国大陸「八十年代人」的影響」330頁。
- (59) 塗懷章「台北郊区訪柏楊」(『文学新風景』2003年7月期) 62頁。
- (60) 徐開塵「朱洪海与柏楊——千裏漫漫書相連」(『民生報』2003年10月26日) 第A5版。
- (61) 陳希林「柏楊熱——北大博士生來台專訪他」(『中国時報』2006年4月17日) 第A8版。
- (62) 陳希林「『醜陋的中国人』彼岸一度查禁 反威權 熬到大陸E世代」(『中国時報』2006年4月17日) 第A8版。
- (63) 陳文芬「柏楊著作大陸授權」(『聯合報』2004年10月24日) 第C6版。
- (64) 陳苑茜「彼岸的柏楊年 兩年前爆紅 今年出了他近40本書 還將改拍電影等」(『聯合報』2006年12月13日) 第C6版。
- (65) 朱洪海「為文明書写的文字——關於柏楊的『醜陋的中国人』」(『出版广角』2008年9月号)。
- (66) 徐虹「柏楊——做『有尊嚴的中国人』『醜陋的中国人』入編『柏楊全集』」(『中青在線——中国青年報』電子版, 2010年5月11日, http://zqb.cyol.com/content/2010-05/11/content_3223491.htm, アクセス日: 2023年9月10日)。
- (67) 「大陸最具影響力的書金庸, 三毛, 瓊瑤作品入選」(『聯合報』2009年10月1日) 第A13版。
- (68) 「網友評選十大最差作品 鹿鼎記榜首」(『聯合報』2009年10月14日) 第A10版。
- (69) 張秋萍「醜陋的中国人」(『語文新圃』2007年1月号)。
- (70) 吳銘能「從東亞病夫到大國崛起」(『聯合報』2008年8月12日) 第A11版。
- (71) 梁文道「柏楊的誘惑, 民族性的誘惑」(『書城』2008年7月号) 16-17頁。
- (72) 余杰『卑賤的中国人』(台北: 台湾主流出版, 2017年), 余杰『今生不做中国人』(台北: 台湾主流出版, 2018年)。
- (73) 「年輕時我也愛讀『醜陋的中国人』, 直到我開始在西方生活」(China Content Center, 2018年10月17日, https://www.youtube.com/watch?v=zDGPgugb_YM&t=233s, アクセス日: 2023年8月21日)。なお, アクセス日の時点で, 動画の再生回数は36万回, 「いいね」は8469件, コメント

は3251件、チャンネル登録者数は36万人だった。

- (74) 「醜陋的中華民國(台湾)人 柏楊給民国粉上課 底層邏輯」(「SHA SA-薩莎-底層邏輯-camera」サイト, 2019年11月15日, <https://www.youtube.com/watch?v=Ix9mmCLfhWQ&t=5s>, アクセス日: 2023年8月21日)。なお, アクセス日の時点で, この動画の再生回数は9343回, 「いゝね」は541件, コメントは345件, チャンネル登録者数は6.02万人だった。
- (75) 「台湾民衆台湾人／中国人認同趨勢分佈」(「国立政治大学選挙研究中心」サイト, 1992年6月～2023年6月, <https://esc.nccu.edu.tw/PageDoc/Detail?fid=7804&id=6960>, アクセス日: 2023年8月28日)。
- (76) 蔡国堂「我們只有一個台湾——要多加珍惜」(『聯合報』1991年4月9日)第11版, 林志忠「從風景区看醜陋的中国人」(『聯合報』1993年8月16日)第11版, 冷欣「紀律」(『經濟日報』1993年11月10日)第26版。
- (77) 李喬『台湾人的醜陋面』(台北:前衛出版社, 1988年), 苦苓『醜陋的台湾人』(台北:太雅出版社, 1992年)。
- (78) 何振忠「柏楊——現在是中国歷史上最好的時代」(『聯合報』1998年12月9日)第2版。
- (79) 蔡志浩「二十年之後」(『中国時報』2004年8月20日)第A15版。
- (80) 張佑生「醜陋的台湾人」(『聯合報』2005年8月31日)第A15版。
- (81) 「再見, 柏老!」(『聯合報』2008年4月30日)第E3版, 楊照「堅持常識 價值的人格者」(『聯合報』2008年4月30日)第E3版, 応鳳凰「一本耐讀的奇書」(『聯合報』2008年5月4日)第E2版。
- (82) 「郭衣洞(柏楊)先生生平事略」(『国史館館刊』復刊第44期, 2008年6月)258頁。
- (83) 「柏楊病逝 骨灰撒綠島海面」(『人間福報』電子版, 2008年4月30日, <https://www.merit-times.com/NewsPage.aspx?unid=82237>, アクセス日: 2023年9月6日)。
- (84) 「柏楊骨灰 安放河南老家」(『聯合報』2010年8月3日)第A13版。
- (85) 「台湾作家柏楊部分骨灰移靈鄭州」(『河南日報』2010年8月4日)／「中国新聞網」電子版, <http://www.chinanews.com.cn/tw/2010/08-04/2445034.shtml>, アクセス日: 2023年9月6日)。
- (86) 李怡芸「柏楊價值 大陸熱 台湾冷」(『中国時報』2018年4月12日)第A16版。
- (87) 李怡芸「兩岸禮敬 台消陸長 柏楊言論自由先驅」(『中国時報』2020年10月25日)第A14版。
- (88) 李怡芸「醜陋的中国人」2024永遠停止發行」(『中国時報』2021年11月11日)第A7版。
- (89) 「柏楊遺孀停發『醜陋的中国人』——避免淪為“去中国化”的工具」(『中国新聞社』電子版, 2021年11月19日, <https://www.youtube.com/watch?v=6eFkV0AoDFM> アクセス日: 2023年8月21日)。なお, アクセス日の時点で, 動画の再生回数は1382回, 「いゝね」は52件, コメントは8件, チャンネル登録者数は18.4万人だった。
- (90) 黄国樑「醜陋的中国人停止發行——大陸引熱議台湾没人理」(『聯合報』2021年11月22日)第A11版。
- (91) 明石靖「『醜陋的中国人』真的不能看嗎?」(『自由時報』電子報, 2021年11月14日, <https://talk.ltn.com.tw/article/breakingnews/3736068>, アクセス日: 2023年8月28日)。
- (92) 李敏勇「醜陋的中国人」『自由時報』電子報, 2021年12月1日, <https://talk.ltn.com.tw/a>

rticle/paper/1487585, アクセス日: 2023年8月28日)。

- (93) 李敏勇「台湾人, 也有醜陋的一面」『自由時報』電子報, 2021年12月8日, <https://talk.ltn.com.tw/article/paper/1488867>, アクセス日: 2023年8月28日)。
- (94) 吉野耕作『文化ナショナリズムの社会学——現代日本のアイデンティティの行方』(名古屋大学出版会, 1997年) 4-7頁。
- (95) 若林正丈『台湾の政治——中華民国台湾化の戦後史 (増補新装版)』(東京大学出版会, 2021年) 160-161頁。